

出エジプト記 3章1～15節 ルカによる福音書 20章27～40節

主と共に一巡りの歩みを過ごした私たちが、こうして主に招かれ、その御前にかしずき、共に主の御言葉に聞こうとしているわけですが、この時、主というこの言葉、この一点に結び合わされているがゆえにまた、私たちそれぞれの心は、主にあって一つとされている、このことを実感させられてもいるのです。ですから、礼拝において、御言葉が語ることは、主と共にある私たちは、主にあって一つであり、それが、事実であり、真実でもあるということです。そして、先週も私たちは、愛する姉妹をご家族と共に天へとお送りすることになったのですが、その際、私たちが知らされ、また、実感させられたことも、この、主と共にある私たちは、主にあって一つである、ということでした。

それゆえ、主にあって、私たちが一つである、そして、生にあっても、死にあっても、同じ一つの命を生きている、この一つの命、一つの歩みを続ける私たちだからこそ、私たちは、御言葉を通し、多くの慰めを受け、癒やされることになるのです。そして、それが事実であり、真実であるから、だから、また大胆にそのことを牧師も口にするのができるのです。そして、それが許されているのは、それを語り伝え続けてきた教会というコミュニティの中に、私たちがこうして置かれているからであり、まただから、私たちは、そのことを実際に、そうだ、そうだ、そうなのだと実感させられることにもなるのです。そして、今日のそれぞれの御言葉が、こうして礼拝に望む私たちに向かい語りかけてくれていることも、それと同じことです。それゆえ、一番肝心なことは、私たちの父なる神様と子なるキリスト・イエスが、御言葉を通し、共にあると言うことを語りかけているということであり、そして、それが事実であり、真実であるということです。復活云々、召命云々といったことは、そ

こから派生するいわば枝葉の部分に過ぎないということです。

では、この事実、真実を示され、つまり、真実に触れた私たちを全体として一つとして包み込むこの主の御心の中に置かれ、私たちは、何を思い、何を感じているのでしょうか。そこで、みくに幼稚園の子どもたちに、みんなの心の中には何が見えますかと尋ねれば、声をそろえて「神様、イエス様～」と大声で叫んでくれるに違いありません。それは、本当にそう思い、感じているからで、そう尋ねる牧師を喜ばせようとしてのことではありません。ですから、このことを謎解き、あの、「何々とかけて、何々と解く、その心は」という謎解きですが、子どもたちに尋ねたことを謎解きに置き換えるなら、つまりはこういうことだと思います。「礼拝とかけて、御言葉の説き明かしと解く、その心は、神様とイエス様だ」と、子どもたちはそう叫ぶということです。そして、聖書の御言葉が子供だましのものでない以上、子どもたちと同じように同じ事を口にするのが礼拝における私たちであり、また、それが正しい答えでもあるということです。けれども、礼拝とかけて、牧師の説教と解く、皆さんのその心は、では、実のところどうでしょうか。

皆さんの心の中で大きな位置を占めているこの時の思い、この時の気持ち、それぞれの感情において、その心の中で大きく支配しているものとは、一体何なのでしょう。それが神様とイエス様であればいいのですが、必ずしもそうとばかりは言えないのではないのでしょうか。もちろん、私たちも、そう言いたいし、そう思いたいのです。また、だから、礼拝を通して、そのように気づきが与えられることを、私たちは願ってやまないし、そもそも、神様もイエス様もそれを心から願ってやまないように思うのです。けれども、実際はどうでしょうか。正直、今、この時、皆さんの心の中に大きな位

置を占めているものは、次のようなことなのではないでしょうか。

一番多いのは、恐らく、長いのはいら  
ない、コンパクトに、美味しいところだ  
け語って、早く説教を終わって欲しい、  
そういうことなのではないでしょうか。  
そして、次に多いのは、恐らく、眠いな  
あ、ということなのでしょう。そして、  
その次はというと、お昼ご飯何食べよう  
かな、ということなのではないかと思ひ  
ます。けれども、もちろん、礼拝に集め  
られているすべての人がそう思い、その  
ような気持ちであるわけではありません。  
愛する者との別れを経験したばかりの方  
は、その悲しみでその心は一杯でありま  
しょうし、また、様々な思い煩いを抱え  
ている方々にとっては、それぞれの具体  
的な課題、問題がその心を大きく支配し  
ていっているのでしょう。ですから、その  
ような具体的な課題を抱えている方々に、  
一つであり、その心は、イエス様であり、  
神様であると、ましてや、だから、神様  
とイエス様がすべていいようにしてくだ  
さるからと、オウム返しのようにそれだ  
けををいくら語ったところで、それでそ  
うかそうかと、どれだけの方が納得す  
ることができるのかとも思います。また、  
もし、私がそれだけを繰り返し語り続け  
るなら、そもそも、早く終わって欲しい、  
眠いなあ、何食べようかな、そう思っ  
ている方たちが、はっと何かに気づいて、  
神様とイエス様だけを見つめるなどとい  
ったことは、起こりようもないことでも  
あるのでしょう。なぜなら、神様とイエ  
ス様が共にいます以上、必ずいいように  
してくださるからと、それだけを聞いて  
いるだけでは、何の解決にもならず、返  
って、疑いを強くするだけだからです。  
ただだから、「礼拝とかけて、牧師の説  
教と解く、その心は」とそこで問うなら、  
「短かければ短いほど人に喜ばれる」と  
そういうことにもなるのでしょう。

ただ、短くスッキリ分かりやすく話を  
して欲しい、説教については、確かにそ  
れに越したことはないとも思います。  
では、神様と共にある私たちがイエス様  
ゆえに一つであるという、御言葉の中心  
的なメッセージについては、それぞれの  
心にある、その時々思いが満たされれ  
ば、自ずと伝わるということなのでしょう。

うか。もちろん、それぞれの思いや気持  
ちが満たされることは、大事なことで  
ありますが、けれども、礼拝者である私  
たちが何に納得し、何に満足するのか。  
それは、やはり神様であり、イエス様で  
ある、それしかないのではないでしょ  
うか。ただし、先ほど、「何々とかけて、  
何々と解く、その心は、神様であり、  
イエス様である」とそう申し上げたよう  
に、礼拝を献げる私たちが、神様とイエ  
ス様しかない、そう思えるためには、正  
しいこの一つの答えに加えて、もう一つ、  
そこには、別の意味があることを知っ  
ておく必要があるように思うのです。

その答えが神様とイエス様と言うこと  
は、確かに正しい答えではあるのですが、  
この答えは、私たちにとっては、同時  
に問いでもあるのです。このことはつま  
り、礼拝とは、私たちが、答えを知る  
だけでなく、それ以前に、この問いの  
前に立たねばならないということです。  
そして、それは、この問いの前に立つ  
というよりも、立たされることになる  
ということでもあります。けれども、そ  
れは、私たちがこうして生きているか  
らです。だから、モーセは、神様に  
向かって、「私は何者なのでしょう  
か」、「その名は一体何か」とこの  
ように問うているわけで、ただだから、  
イエス様も、「神は死んだ者の神ではな  
く、生きている者の神なのだ。すべての  
人は、神によって生きているからであ  
る」と、イエス様に問うサドカイ派の  
人々に対し、そのように答えてもいる  
のです。

短く終わって欲しい、眠いなあ、お昼  
何を食べようか、また、どうして自分  
はこんなに苦しい思いをしなければならない  
のか、どうしてこんなに悲しい思いを  
しなければならないのか、礼拝を献  
げる私たちが、そんな思いに駆られる  
のは、私たちがこうして現に生きている  
からです。ですから、皆さんそれぞれの  
心の中で大きな場所を占めている様  
々な思いは、私たちがこうして生身の  
体をもって生きているがゆえのものと  
あり、そうである以上、人にとやかく  
は言われたくはありません。けれども、  
そうであるからこそまた、その思い  
に直ぐに答えていただきたいし、また、  
そうであるからこそ、その思いに直  
ちに答えてはくださらない神様

に向かって、まさに、モーセのように、また、イエス様の前に立つファリサイ派の人々のように、私たちもまた、疑問を投げかけることになるのです。

ただし、この疑問を投げかけるということについては、私たちは、後ろ暗い、後ろめたい気持ちを抱える必要はありません。それについて負い目を負う必要はまったくないのです。それは、思ってしまったのだから仕方ないということではありません。イエス様があなた方の心の中にあるものが悪いのだと仰っているように、だから、何を思ってもいいということではもちろんありません。しかし、そうではなく、神様とイエス様と相對する中で、そこで、私たちが何を思うものであるのか。それについて、マタイによる福音書の一番最後には、次のようなことが語られています。すべての人々を弟子とし、それらの人々に洗礼を授け、命じられたことのすべてを守るようにと伝えなさい、とイエス様が仰った、あの、いわゆる、主イエスの大宣教命令と言われていることが語られているのですが、この言葉を聞くその直前の弟子たちの様子について、御言葉は、次のようにも語っているのです。そこには、「主イエスにひれ伏す者がいる一方で、疑う者もいた」ということが語られているのですが、つまりはそれが、主イエスに御言葉を宣べ伝えるように命じられたその時の弟子たちの姿であるということです。そして、このことはつまり、主イエスのなさったことに対して疑いを初めから抱いた者がいたというのが、私たち主の教会の姿でもあったということです。

それゆえ、それが主の御前における私たちのある一面を現すものであり、その人たちに向かって、主イエスの大宣教命令が語られている以上、疑うことに必要以上に後ろ向きな思いを感じる必要はありません。そもそも、神の御前に主イエスと共に立つということは、そういうものであり、むしろ、神様とイエス様がなさろうとしている事への疑問、自らが発するその問いの前に、私たちがしっかりと立つことが、御言葉を宣べ伝えるということでもあるからです。そして、その私たちの姿がいかなるものなのかを教えてください、ここでのモーセで

あり、サドカイ派の人々であるように思うのです。では、そのそれぞれの有様を通し、先ず私たちが知らされることは何か。それは、まさに、後ろ暗く、後ろ向きの姿です。それも、神様もイエス様も、そのことについてはまったく気にしていないにもかかわらず、そのことが気になって気になって仕方ない、そんな姿です。それは、私たちがこうして生きているからであり、けれども、この日、御言葉が語ってくれていることは、その後ろ向きで後ろ暗い者に向かって、神様もイエス様も、一つも咎め立てることなくその御心を明らかにしてくださっているということです。それが、それ以上でもなければそれ以下でもない先ほど申し上げた、主と共にある私たちは一つであるという、この事実であり、真実であるということです。

出エジプト記 3:1 に記されているモーセの姿は、2:11 以下に記されていることと合わせて読むならば、モーセのその後ろ向きで後ろ暗いその時の有様をよく理解することができるのでしょう。なぜなら、この時のモーセは、逃亡者であり、殺人者であったからです。しかも、そのことに後ろ暗さを感じていた、つまり、ささくれだって、気持ちも定まらずにいたのがこの時のモーセであり、だから、恐らくは、仕事にも身が入っていなかったのでしょう。ですから、そのように考えれば、生ける屍のごとく、無為徒食な暮らしを繰り返していたのがこの時のモーセであったということです。それゆえ、そのような姿は、神の御前に立つことも進み行くことも、到底許されるものではないのでしょう。もし、私たちがこのモーセと自分自身とを重ね合わせて見たらどうでしょうか。喜び勇んで神様の御前に進み行くことができるでしょうか。けれども、そのモーセを神様ご自身が招かれた。私は、ここに礼拝の意味があるように思います。つまり、主イエスが、「医者が必要とするのは、健康な人ではなく、病人である。私が来たのは正しい人を招くためでなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」と仰るように、神様の御心の外にある人々を御心の内に招こうとされているのが、主なる神様であり、私たちの主イエスであるというこ

とです。けれども、それを私たちは誤解しているところはないでしょうか。

今、イエス様のお言葉に少し触れましたが、イエス様がこうして私たちを招くその意図を、つまり、「正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」と仰ったその言葉を、私たちの後ろ暗さにさらに追い打ちをかけるようなものとしてのみ理解してはいないか、ということです。神様の御前に立たされた私たちは、弱く、儂く、もろいものです。それは、その自信のなさや愚かさゆえのことでもあります。それゆえ、自らの苦しみや悲しみに溺れ、自分を見失い、まるで、捨てられた子犬のように、ブルブル震える姿を神様の御前に現すことにもなるのでしょう。また、だから、そういう自分を見たくないし、知りたくない、そう思うから—それがまさに私たちが生きていると言うことでもあるのでしょう—、自分の中に異質なものを取り込んだときに起こる免疫反応のように、神を拒み、あるいは、見ないようにする、それが、主イエスの御前に立つここでのサドカイ派の人々でもあるのでしょう。だから、神様のなさることにもイエス様のなさることにも、疑いを抱き、不満をぶつけてしまうのです。また、だから、こうして生きているがゆえに、神様とイエス様を見ないがゆえに、生きる事への不安、生きる事への恐れを募らせることにもなるのです。しかし、そのようにしか生き得ない、それが生きることだと思い込む、そのような私たちを御心の中へと招いてくださっているのが、私たちの主なる神様であり、私たちの主イエス・キリストなのです。

神様のその御心の外に置かれていると思ひ込む人々のその苦しみをつぶさにご覧になり、その叫び声を聞き、その痛みを知り、私たちがこうして生きているところに自ら下って来られたのが私たちの神様であり、また、その私たちの下へとイエス様をお遣わしくくださったのが、私たちの神様なのです。従って、低きに下り、私たちを救い、ご自分のいますところに導いてくださっているのが、私たちの神様であり、つまりは、礼拝をこうして共に献げる私たちは、この神様の御心の内に置かれ、そのことを知らされてい

るということです。しかも、神様は、大きく線を引いて、お前たちの居場所はここ、と大雑把なことを仰るのではありません。主イエスの十字架と復活の出来事を通し、御心の内に置かれている私たちの命が、また、私たちの人生の道筋が、主という言葉のゆえに守られ、支えられ、導かれている、このことをはっきりと知らしめてくださったのが、主イエスの出来事でもあるのです。だから、疑い迷う者が信じる者へと変えられていく、不安や恐れに包まれている者が平安へと導かれる、それもこれも、私たちが主—この言葉につなぎ合わされ、神様の御心の内に置かれ、こうして歩む者だからです。このように、主の御心の中に置かれ、それぞれの人生を歩むのが私たちである。ただ、そのことが時に分からなくなり、見えなくなる。そのために不安になり、恐れを抱くことになり、神様を疑い、神様から離れてしまいたくもなる。けれども、その私たちのことを御心の中に置き、なお、ご自分のいますそのところに招き、導こうとされているのが、私たちの神様なのです。

私たちは、子どものように、それを言われたからといって、子どもと同じように直ぐに「はい分かりました」と答えることはできないのかもしれませんが。だから、神様とイエス様という、この問いの前に立たねばならないのです。けれども、恐れずこうしてこの問いの前に立つなら、私たちは、それが私たちの求める答えであることを知るのです。主にあって共にある私たちは、主にあって一つとされている、そのことをこうして生きる中で知らされているのが、礼拝を献げる私たちなのです。

このように、神様の御心の中に置かれている私たちの姿、そのことにどれほど疑いを抱き、どれほど不安に思ったとしても、それが、御言葉が私たちに語りかける真実であり、また、事実でもある。それを御言葉を通して知らされているのが、こうして神様を礼拝する私たちなのです。そのことをしっかりと心に留め、また新たな一巡りの歩みへと送り出されて参りたいと思います。

祈り